

演奏者

♪パートトップ

第1ヴァイオリン

榎本 学
小島 暁子
後藤 信也
後藤 勉
富山 直美
福田 久美子
♪三木 聡一郎
宮島 史英
生駒 陽子 (賛助)
内山 秀文 (賛助)
小林 琴 (賛助)
佐藤 舞 (賛助)
鹿田 玄輝 (賛助)
田中 美保 (賛助)
林 健太郎 (賛助)
山田 直人 (賛助)

第2ヴァイオリン

♪大野 愛
片山 徹
唐木 貴子
佐藤 郁子
高橋 由紀
林 秀樹
宮川 朋広
山本 信彦
中島 由恵 (賛助)
細淵 淨二 (賛助)
横山 和可子 (賛助)
吉田 弘幸 (賛助)

ヴィオラ

相川 美佐子
鹿田 澄子
♪友末 洋一
内藤 真紀子
二宮 奈緒美
萩原 経
♪林 昌英
舟曳 千冬
安田 浩子
小松 聡 (賛助)
小松 純子 (賛助)

チェロ

今井 悠太
岩下 泰久
♪高原 あゆみ
豊田 千織
豊田 真広
中谷 奉子
菊川 真 (賛助)
三木 哲 (賛助)

コントラバス

井上 望
小澤 英輔
小島 大介
橋本 由理子
柳町 弘毅
♪山崎 歩
山田 啓太 (賛助)
吉川 航太 (賛助)

フルート

白崎 哲哉
辻 悠子
♪宮本 英俊
山内 久美子
山下 菜摘

オーボエ

古田島 綾子
♪野村 隆浩
佐口 康晴 (賛助)
八十川 歆 (賛助)

クラリネット

♪相川 大輔
古西 章子
百元 朝子
三村 好美

ファゴット

栗原 治男
二上 義幸
♪藤田 高
藤村 伸夫

ホルン

伊藤 正
佐久間 絵理子
柴田 真砂男
二宮 一敏
バジル・クリツァー
樋口 愛美
♪南 朋子

指揮 石川 征太郎

ヴァイオリン 成田 達輝

トランペット

石林 浩樹
♪伊豫田 望
遠矢 祥弘 (賛助)

トロンボーン&チューバ

植松 喜孝
関根 一臣
♪高橋 正積
北岡 寛司 (賛助)

パーカッション

♪河竹 千春
野村 万季
小林 緑生 (賛助)
富田 奈緒子 (賛助)
森本 太郎 (賛助)

指導者 (50音順)

遠藤 香奈子
奥泉 貴圭
加藤 智浩
斎藤 和志
寺本 義明
橋本 晋哉
(敬称略)

運営

団長
コンサートマスター

インスペクター
会計
ライブラリアン
録音

関根 一臣
大野 愛
小島 暁子
三木 聡一郎
山本 信彦
柴田 真砂男
南 朋子
藤村 伸夫
伊藤 正
関根 一臣
野村 隆浩
野村 万季
藤村 伸夫
植松 喜孝
柴田 真砂男
野村 万季
南 朋子

ホームページ・ML
会場

選曲

伊豫田 望
白崎 哲哉
中谷 奉子
林 秀樹

演奏会

委員長
ステージマネージャー
会計
チケット
ステージ
プログラム・チラシ
広報
記録・VTR
催事
舟曳 千冬
本野 正
宮島 史英
柳町 美香
二上 義幸
安田 浩子
山下 菜摘
佐藤 郁子
樋口 愛美



GLOBAL PHILHARMONIC ORCHESTRA

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ

1981年、静岡県オペラ協会が主催するオペラ公演への参加のため結成、「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」などを共演した。1984年以降、シンフォニーオーケストラとして年2回の定期演奏会を中心に活動を行っている。モナコ・フランス、オーストリアと2度の海外公演を行ったほか、ヴァイオリン奏者のJ.J. カントロフ氏やソプラノ歌手の故佐藤しのぶ氏、ピアノ奏者のイリーナ・メジュエワ氏、サクソフォン奏者の上野耕平氏など多彩なソリストとの共演を果たした。創立40年を過ぎて当初50名程度だった団員も100名を超える大所

帯となり、ある時は古典派の緻密な様式美の再現に取り組み、またある時は近現代作曲家の大曲に果敢に立ち向かうが、奏者と聴衆がともに音楽を愉しめる瞬間を創り出すという精神を忘れることなく、日々の取り組みを続けている。年齢も職業もさまざまな、個性豊かな団員を擁するアマチュア・オーケストラである。



◀ 当団ホームページ
動画を掲載しております
ご視聴ください

第76回 定期演奏会 ご案内

2027年3月13日 (土) 19:00開演 (18:15開場) 【会場】 ミューザ川崎シンフォニーホール
指揮：森口 真司

〔曲目〕

- ◆ワーグナー 《リエンツィ》序曲
- ◆ワーグナー 《ローエングリン》第1幕前奏曲
- ◆ワーグナー 《タンホイザー》序曲
- ◆ベートーヴェン 交響曲第7番

※未就学のお子様のご入場はご遠慮ください

〔入場料〕 2,000円(全席指定)
※2026年12月1日チケット発売開始予定

〔取扱い〕



◀ チケットのご購入はこちら
[teket]
<https://teket.jp/11695/69745>

〔問合せ〕 globalphil.ad@gmail.com
<https://www.globalphil.net/>

第75回 定期演奏会



GLOBAL PHILHARMONIC ORCHESTRA

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ

指揮

石川 征太郎

Seitaro Ishikawa

ヴァイオリン

成田 達輝

Tatsuki Narita

PROGRAM

ストラヴィンスキー
プルチネルラ組曲

Stravinsky: Pulcinella-Suite

ストラヴィンスキー
ヴァイオリン協奏曲

Stravinsky: Violin concerto

ショスタコーヴィチ
交響曲第10番

Shostakovich: Symphony No.10

2026

7/5

日

12:45 開場
13:30 開演

すみだトリフォニーホール 大ホール



団長挨拶

本日はグローバル・フィルハーモニック・オーケストラ第75回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。今回は、20世紀音楽を代表する二人の作曲家、ストラヴィンスキーとショスタコーヴィチの作品を中心としたプログラムをお届けいたします。

指揮には石川征太郎さんをお迎えしました。石川さんは端正かつ情熱的な音楽づくりで知られており、作品の構造を明快に描き出しながら、オーケストラの響きを豊かに引き出してくださいます。練習でも、一つひとつの音楽に丁寧に向き合いながら、私たちとともに作品の魅力を深く掘り下げてくださいました。

また、ストラヴィンスキーのヴァイオリン協奏曲では、ソリストとして成田達輝さんにご出演いただきます。成田さんは国内外で高い評価を受け、繊細さと力強さを兼ね備えた演奏で多くの聴衆を魅了されています。この協奏曲は、独特のリズム感と透明感のある響き、そしてヴァイオリンとオーケストラとの緊密な対話が魅力の作品です。成田さんの卓越した演奏によって、この作品の持つ機知と躍動感を存分に味わっていただけることと思います。

前半に演奏いたします《プルチネルラ組曲》は、18世紀音楽への敬意を土台としながら、ストラヴィンスキーならではの洗練された感覚によって再構築された作品です。一方、後半に演奏するショスタコーヴィチの交響曲第10番は、深い陰影と激しいエネルギーを内包した大作であり、作曲家が生きた時代の緊張感や内面的な葛藤、そして強い意志を感じさせます。同じ20世紀の作品でありながら、対照的な個性を持つ音楽の世界をお楽しみいただければ幸いです。それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。

団長 関根一臣

PROFILE



指揮
石川 征太郎
Seitaro Ishikawa



ヴァイオリン
成田 達輝
Tatsuki Narita

東京藝術大学音楽学部指揮科、ロベルト・シューマン音楽大学デュッセルドルフ指揮科卒業および同大学院修了。
藝大卒業時にアカンサス音楽賞受賞。2011、2012年度ロームミュージックファンデーション奨学生。2015年国際リヒルト・ワグナー協会奨学生。2016年第1回フェリックス・メンデルスゾーン国際指揮者コンクール第2位受賞。
レパートリーはバロックから現代音楽まで幅広く、国内外で新作初演も積極的に行なっている。2016年サントリー芸術財団サマーフェスティバル国際作曲家委嘱シリーズ〈カイヤ・サーリアホ〉に出演。2018年にはハンブルク州立歌劇場にてペーター・ルジツカのオペラ「ベンヤミン」の副指揮を務め、世界初演の成功に貢献するなど国内外で幅広く活躍している。

▶公式サイト：https://www.seitaro-ishikawa.ashitaz.com/

2010年ロン＝ティボー国際コンクール第2位、2012年エリザベート王妃国際音楽コンクール第2位。その超絶技巧と詩情豊かな音楽性に「パガニーニの再来」とフランス紙で評された。著名指揮者および国内外のオーケストラと多数共演し高い評価を得るとともに、リサイタルやジャンルにこだわらない様々なアーティストとの室内楽においても圧倒的なテクニックと多彩な表現力を披露している。
現代作曲家とのコラボレーションも積極的に行っており、2022年9月には坂本龍一のライブ録音に参加し「ソナタ」等を演奏。
海外での演奏活動も積極的に行っている。
使用楽器は、A. ストラディヴァリ黄金期の「Tartini」1711年製（宗次コレクションより貸与）。

▶公式サイト：https://tatsukinarita.com/

お客さまへのお願い

- ◆携帯電話、時計のアラーム等は必ずお切りください。
- ◆私語、お荷物を整理する音など、演奏中に物音が出ませんようご配慮ください。
- ◆演奏中の入退場はご遠慮ください。
- ◆会場内での録画、録音、写真撮影はお断りいたします。
- ◆出演者への花束、プレゼントの受付は停止しておりますのでご了承ください。
- ◆会場内でのマスク着脱はお客さまのご判断に委ねますが、ブラボーなどの声援をされる場合にはマスクの着用を推奨いたします。

PROGRAM NOTE

イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）とドミートリー・ショスタコーヴィチ（1906-1975）。ロシア出身の20世紀を代表する作曲家、という以外はことごとく対照的な2人だ。

ストラヴィンスキーは「春の祭典」など革命的な「三大バレエ」を発表した後、作風を何度も大きく変え、演奏機会の多い作品を残した。第一次世界大戦とロシア革命を機に国を離れたが、世界各地で活躍し、時代を作った存在として敬意を集めた。

ショスタコーヴィチは少年期に1917年のロシア革命を体験し、その後ソヴィエトを代表する存在となり国内に留まり続けた。早期から天才と認められたが、自国の政治体制下の圧力などもあって作風を制限せざるを得ず、欧州からは時代遅れと揶揄されることもあり、20世紀中は一部の曲以外は演奏機会も多くなかった。

しかし21世紀に入り、ショスタコーヴィチの状況は一変。演奏機会が激増し、いまや世界の楽壇で彼なしのシーズンは考えられない。かたや“時代を作った”、かたや“時代遅れ”といわれた両者が、“時代を超越した”メッセージを伝える作曲家として定着したのである。

◆ストラヴィンスキー

バレエ音楽「プルチネルラ」組曲

ストラヴィンスキーは1910年代前半の「三大バレエ」で管弦楽の可能性を拡大した後、1920年頃には古い音楽に範をとる新古典主義的作風に変化した。「プルチネルラ」とヴァイオリン協奏曲はこの時期の代表作である。

「プルチネルラ」は、原始主義的に書かれた「春の祭典」「結婚」の後、新たな作風に変化した「兵士の物語」に続いて書かれたバレエ音楽である。16世紀イタリアの仮面の道化師による「コメディア・デラルテ」に倣った喜劇で、1920年に初演。18世紀イタリアのベルゴレージの楽曲（後にガロなど他の作曲家の作と判明した曲も）をもとに、現代的な和声感や特殊奏法の音色を取り込んだ音楽で、ここから新古典主義的作風を確立したのである。歌手も入る原曲から、1924年に管弦楽用組曲が編まれ、さらに1947年に改訂された。弦楽器各パートのソロが独立して全奏と対比される、バロックの合奏協奏曲形式がとられる。

1. 序曲 ガロの旋律による、本作の顔となる快活そのものの1曲。
2. セレナータ オーボエの古典的な旋律美に、特殊奏法の音色が彩りを与える。
3. スケルツィーノ・アレグロ・アンダンティーノ 軽妙な音楽による3つの場面。
4. タランテラ イタリアの8分の6拍子の舞曲を軽やかに快速に。
5. トッカータ バロックらしい音楽にトランペットが華やかさを加える。
6. 2つの変奏の付いたガヴォット 管楽器のみで奏でられる、雅な旋律とヴァリエーション。
7. ヴィーヴォ（いきいきと）コントラバスとトロンボーンのソロが活躍。
8. メヌエット・フィナーレ 美しいメヌエットが盛り上がり、そのまま快活なフィナーレに入って目まぐるしくハッピーエンドを迎える。

◆ストラヴィンスキー

ヴァイオリン協奏曲 ニ調

1930年に出会ったポーランド系アメリカ人のヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシュキンからヴァイオリン協奏曲を依頼され、翌1931年完成。同年に彼の独奏、作曲者の指揮で初演された。

各楽章は独奏の開放弦のレ、8度上のミ、その11度も上のラの3重音で始まり、本作の「パスポート」和音とも呼ばれる。11度はヴァイオリンでも異例の音程幅で、この明快に響くがどこか不思議な和音を契機に、不思議な変拍子やリズムが交錯していく。あたかも過去の名作の“協奏曲らしさ”を避けるかのように、乾いた響きで室内乐的。独奏は技巧を聴かせつつ、常にオーケストラの何かの楽器と絡み、様々な楽器との“共”奏を展開。特に管楽器の活躍は顕著だ。

技巧性はもちろんのこと、仕掛け満載の音楽の中でどれだけ“遊び”ができるのか。この特殊な傑作を、成田達輝という、いま掛け値なしに世界最高の表現ができるヴァイオリニストで体験できる。千の解説より、この人の

生み出す音を聴き、全身の動きを見ればいい。僥倖とはこのこと。

第1楽章 トッカータ 「パスポート」和音から、淡々と進みながらも遊び心があふれる。

第2楽章 アリアⅠ／**第3楽章** アリアⅡ 第1のアリアは二長調で速めの音楽。第2のアリアは嬰へ短調で非常にゆっくり。（この2つの楽章をまとめて1つの楽章とみなすこともある）

第4楽章 カプリッチョ 快速の音楽でシャープな技巧性と喜遊曲的な愉悦感を両立。独奏とコンサートマスターのヴァイオリン二重奏になる場面も。

◆ショスタコーヴィチ

交響曲第10番 ホ短調 作品93

1930年代以降のソヴィエト国内では、前衛や新古典主義どころか、当局の「社会主義リアリズム」なる芸術表現の要請で、平易な作風が実質的に強要されていた。しかし1953年3月5日、粛清による独裁体制を敷いていた最高指導者スターリンが亡くなった（なお、プロコフィエフも全く同日に没している）。その後厳しい統制が緩和されていき、その「雪どけ」と呼ばれる時期を象徴する作品となったのが、同年完成・初演された交響曲第10番である。有名作の第5番を除けば、最も演奏機会の多い彼のシンフォニーであり、早くから傑作と認められてきた一方、謎も多く、特に自らの署名「DSCH」の多用は際立った特徴となる。

※「DSCH」音型……「レ・ミ♭・ド・シ」の4音モチーフ。“Dmitri SCHostakovitch”の大文字部分をドイツ音名にした「DS(Es)CH」で、彼の音による署名として知られる。

第1楽章 モデラート 重厚かつ緊張感に満ちた長大な楽章。冒頭の低弦による第1主題とフルートの低音による第2主題をもとに展開。ひたひたと巨大化していくクライマックスは圧巻。謎めいた終結も印象的。

第2楽章 アレグロ この楽章については、作曲者自身が「スターリンの肖像」と語った、いやそれは捏造だ、など諸説ある。確実なのは、「陰」や「負」の感情が、最高の格好良さで凝縮されていること。異常な負のエネルギーの生み出す興奮たるや。356小節を約4分で爆走し、心の奥底を容赦なく抉る究極的一篇。

第3楽章 アレグレット 嵐の後は不気味なワルツに。やがて木管から「DSCH」が繰り返される。その後連続するホルンソロは、マーラー「大地の歌」第1楽章冒頭と同じ音列（その楽章のテーマは「生は暗く、死もまた暗い」）であり、かつ当時（妻がいながら）思いを寄せていた教え子の名「エリミール」の音名象徴にもなっている。やがて巨大化した「エリミール」に、歪んだ「DSCH」が絡み続ける場面も……後世の研究で初めてわかった、ダブルミーニング、公私の意図的な錯綜。いずれもこの作曲家の面目躍如でもある。

第4楽章 アンダンテ・アレグロ 内省的な序奏に続き、妙な明るさの落ち着かない主部が続く。後半切迫しながら到達した頂点で「DSCH」が最強音で屹立。終結部では金管にティンパニまでが「DSCH」を連打。異様な狂騒の中で幕を閉じる。

林昌英(音楽ライター)